

関西社会福祉学会/日本社会福祉学会関西地域ブロック第56回若手研究者・院生情報交換会

テーマ：海外での学びと研究の意義 異なる文化や環境下での研究実体験から得られるもの

開催日時：2024年3月17日(日) 14：00～16：30

会場：大阪公立大学杉本キャンパス 杉本図書館10F 研究者交流室

報告：天谷宙詩（大阪公立大学大学院生活科学研究科後期博士課程）

第56回若手研究者・院生情報交換会が、大阪公立大学杉本キャンパスにて2024年3月17日(日)の14：00～16：30に開催された。本会は、若手研究者および院生のみならずベテラン教員や数名の学部生を含めた28名の参加者とともに行われた。まず、関西地域ブロック担当理事の所めぐみ氏（関西大学）から開会の挨拶をいただき、その後は、鶴浦直子氏(大阪公立大学)の司会進行によって3名の登壇者の報告会へと移った。

第1報告者の遠藤希和子氏(金城学院大学)は、自身が帰国子女という体験や海外への大学進学を通じて学んだことなどをご報告いただいた。遠藤氏は、異なる文化や環境下での研究実体験から得られるものの具体例として、「精神力」、「資金調達スキル」、「ネットワーキング」の3点を挙げておられた。まず、「精神力」については「JUST DO IT !」や「やるか、やらないか、ただそれだけ」といったキーワードが挙げられており、何かに挑戦するにあたっての心構えとなるメッセージが込められていた。また、「資金調達スキル」では、時には研究を遂行するためにお金が必要になるといった現実的な問題について、若手研究員や院生が使える経済的支援は可能な限り利用することやその情報を収集することが必要になると言及した。特に、この資金調達の場合である科研やDC/PDなどへ申請する際に、自分自身の研究計画を再度見直すことができるチャンスをして有効活用することが重要であると語られた。最後の「ネットワーキング」では、人とのネットワーキングによって新たな研究や発見につながることもあるため、学会への積極的な参加や国際的に広い視野を展開することの重要性についてアドバイスをいただいた。

第2報告者の朴蕙彬氏(新見公立大学)は、「日本に留学に来た元留学生の経験から」と題して、自身が元留学生という立場から、日本で学んだことだけでなく、日本で学術研究を行うことの意義についてもご報告された。なかでも、言語の壁は高く、日本の修士課程で執筆した修士研究を母国語である韓国語で詳細に説明することができなかった悔しい経験や国際学会での発表後の英語による質疑応答に苦戦したことなどの実体験を語られた。また、研究を進める上で自分自身が何をしたいのかを明確にすることが必要であるという考えから、自分自身のルーツを確認しながら、日本という環境がどのようなものなのかを今一度考えることで、改めて日本で研究をする意義を見つけることができたと言った。このような朴氏の体験談から、国際研究を行う意義やそこで何を明らかにしたのかを十分に理解することの重要性についてアドバイスをいただいた。

第3報告者の田中弘美氏(大阪公立大学)からは、日本の大学から海外の大学への留学を経験し、憧れの国であったスウェーデンへの交換留学から学んだことをご報告いただいた。修士課程で

はイギリスの大学院に進学したが、研究に関する理論や方法論についてディスカッションの日に苦戦したが、そのから多くを学ぶことができたとして自身の体験談から語った。留学および海外研究を通じて得られたものとして「人・価値観・景色との出会い」、「世界にできたネットワーク」、「研究者として走り続けるための筋肉」の3点を挙げられた。「人・価値観・景色との出会い」については、世界に飛び出していくことで自分自身の狭い価値観からより広い価値観や経験を得ることができ、さらには、生きていく上で大事にしていきたい考え方についても得ることができたと言った。また「世界にできたネットワーク」については、憧れの研究者とつながることができたことや国際的な共同研究の種を蒔くことで、新たな研究を進めるためのネットワークが形成されると言及した。最後に挙げられた「研究者として走り続けるための筋肉」については、語学力やアカデミックスキルを獲得したことによって国際水準の研究理論や方法論について学ぶことができたと言われた。総じて、国際的な広い視野を持ちながら、自分自身でよい環境を作ることが重要であると教わった。

報告後は休憩を挟んだのちに、司会進行の鶴浦氏と登壇者の3名を囲んだ座談会が行われた。座談会では、報告内容のほかに「海外での研究を行うなかで苦労したこと」や「これからの研究ビジョン」などについて話題が投げかけられた。また、参加者からは「大学院を卒業した後の生活について」や「国際研究を行う際の研究姿勢について」などの質問が挙がり、充実かつ白熱した座談会となった。

総括では、開催校である大阪公立大学の生活科学研究科の研究科長である所道彦氏(大阪公立大学)より、若手研究員や院生だからこそ経験できることが多くあり、国内での研究にとどまることなく視野を広げながら国際研究などにも挑戦してもらいたいとの激励をいただいた。また、本会の終了後には、懇親会が開かれて多くの参加者が出席した。この懇親会では、世代や所属機関の壁を越えたネットワークづくりや情報共有、意見交換が賑やかかつ盛大に行われた。

最後になりますが、第56回若手研究者・院生情報交換会の開催にあたり、会場を提供してくださった大阪公立大学様をはじめ、さらには、多大なるご尽力を賜った学会員の方々、関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

以上